

後発地震注意情報で弘大・前田教授

日ごろの備え確認を

本県東方沖で8日深夜に発生したマグニチュード(M)7.5の地震では、八戸市で最大震度6強、おいらせ町と階上町では震度6弱を観測。さらに大きな地震の引き金となる可能性があるとして、気象庁と内閣府が初めて「北海道・三陸沖後発地震注意情報」を発表した。地震学や津波予測が専門の弘前大学大学院理工学研究科の前田拓人教授は過去の大地震の発生状況などから「後発地震注意情報の対象有無にかかわらず、日ごろの備えを改めて確認、見直してほしい」と呼び掛けている。

(稲葉智絵)

十勝沖震源域、前兆なく突然発生

対象外地域にも呼び掛け

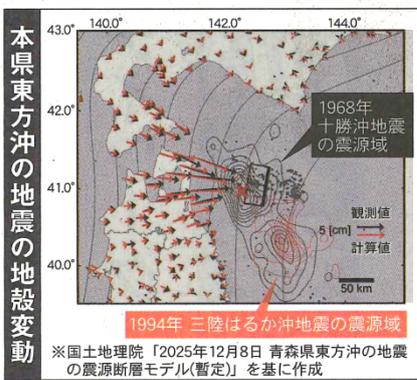


前田 拓人教授

本県東方沖を含む東北地方の太平洋沖では、厚さ1000mの海側(太平洋)プレートが日本海溝で陸側プレートの下に沈み込み続けている。前田教授は「プレート同士の境界ではひずみが蓄積する。ひずみが限界に達した時、プレート境界の一部に破壊が起きて滑り、大地震や津波を引き起こす。本県東方沖などでは何万年もそれを繰り返している」と話す。

政府の地震調査委員会によると、今回の地震は海面

から深さ約55kmのプレート境界で発生したと考えられるという。前田教授は今回の震源地が1968年の「十勝沖地震」(M7.9、死者52人)の震源域内の北部に当たるとし、「同地震の震源域内の」南部で起きた今回の地震。前田教授は「気象庁の震央分布図を見ながら「地震は繰り返されるが、(今回の)地震発生前、本県東方沖で震度1以上の観測がほとんど見られなかった。そのことから(今回は)再び大きな地震が起きる可能性が高くなっている。注意が必要」とした。重ねて、江戸時代に津軽平野で巨大地震が発生した歴史に触れ、「弘前市などの対象外地域の皆さんも普段の備えを強化してほしい。また、後発地震注意情報の対象地域を訪れる際は、事前に避難場所や経路などを確認してもらいたい」と話した。



は94年に「三陸はるか沖地震」(M7.9、死者3人)が起きたが、その後30年近く、震源域内で大きな地震が発生していなかった」とした。

前兆がなく突然発生したと考えられる」と説明した。地震の規模の大きさは、長周期地震動にも表れており、震度6強だった八戸市など三八上北では立っていることが困難な階級3を観測。弘前市など津軽でも物につかまりたいと感じる階級2だった。

初めて発表された後発地震注意情報について、前田教授は「今はプレート同士のバランスが崩れた直後、

に東方向の地殻変動が観測された」と発表。国土地理院の観測データによると、最も大きかったのが東通村の二つの観測点で約9cm、六ヶ所村で約8cm、八戸市で約3cm、弘前市では約2cm移動した。

※この画像は当該ページに限って
陸奥新報社が利用を許諾したものです。
[問合せ先]弘前大学理工学研究科
E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp